# リップ

佐々木　保典

# 1

　黄は地の色であり、衰えの象徴であるとどこかで聞いたことがあるが、私の知る限りの記憶の中で、『黄昏』ということばの響きに衰老を感じたことなど一度もなかった。かつて何度も見た、宵闇を待つ海の色だったし、故郷の湖に沈む夕日の色だった。黄昏に誘われて現れる夜が、次の日に明けないこともなかった。
　しかし、明けない夜が確実にこの世に存在していることを、夕日に鈍色の光をぬめらせるこの墓石が証明している。
　生きるかたちを探している。
　友人がそうつぶやいた日も夕焼けが映える日で、私は黄昏を愛でながら逆光の中に立ちつくす彼を見た。彼の言葉が私の脳裏に輝かしく焼き付いたのは、きっと陽光のせいに間違いなく、そうでなければ私も、彼のつぶやきのどこかに感慨を抱いたのだろう。不思議な話ではある。どうして、生きるかたち、などという曖昧で極めて不明瞭な言貌の印象に、こころを囚われたのだろう。自問して、どうにかなる類のものではない。彼の墓石をすがるように見つめる私がその証拠だ。
　何をおもいながら彼が生きるかたちなどとつぶやいたかは、いまとなってはわからない。
　彼は地球を飛び出して、宇宙を自由に航海できる資格をもつ数少ない人間の一人だった。仕事に卒が無く、細やかな配慮が出来る男で、失敗したからといって簡単には修復できない宇宙空間での業務をなんなくこなした。だから誰もが、彼が船殻さえも捨てて生身の遊泳を行ったなどとは、最初信じなかった。
　私は、地球上の人間が宇宙空間で行うビジネス、多くは軍事的なものだが、それを仲介し、航宙士と呼ばれる職業宇宙飛行士に仕事を斡旋する商売をしていたので、彼が無言のままコンソールにハッチ開放の指示を出して、大気などというのどかな響きとはまったく無縁の世界へと飛び出していく様を、取引先の人間と一緒にすべて見ていた。
　彼はよく種々の改良点に気づく有能な航宙士で、地球外作業シャトルを扱う大手メーカのアドバイザでもあったから、彼の乗る船には金がかけられてあり、ハッチが開いたからといって、すぐさまにすべてが真空に晒されるようなやわな構造にはなっていないはずだった。彼はシャトルの自動制御機構への通電をすべてカットし、ゆっくりと何かを確かめるようにハッチを開いて、緊急用の防護扉ロックも手動で解除した。外気圧と居住空間の圧力の差が、限りなく０に近いときにだけハッチが開放されるように組まれたシーケンス命令は、太陽光を利用するまったく独立した通電経路をもっていたが、彼は易々と書き換えており、さも何事もなかったように、真空に吐き出されていった。
　彼の表情が、最後に船殻カメラにアップになり、確かに彼は何かをつぶやいたように見えた。マイクが彼の声を拾うにはすでにまわりはあまりに閑散としており、空気さえもどこかへと消えていった後だった。
　彼はどこへ行っただろう。
　どんな姿になっているのだろう。

周囲は狂人の行動だと噂したが、正気の沙汰の範囲に、彼の求める生きるかたちがなかったのだとすれば、私だけは首を傾げずにいられるように思った。
彼は間違いなく、最後に私に向かって何事かをつぶやいたのだ。お互いをファストネームで呼ぶこともなく、仕事以外で特に親しいと思うような間柄でもなかったが、この一件の後、彼は私を友と感じてくれていたのだ、と考えるようになった。皮肉なことに、彼はすでにこの世の人ではなかったので、私は友人を作り出したと同時に、刹那の間もおかず失ったのだった。おそらく、これからさき、思い出す彼は常に友の様相であるが、現実には存在せず、彼の生と死は重なり合ったまま、私の内側に息づき続けるのだろう。
その出来事からは、随分と月日が流れた。
彼の墓前に流れる夕暮れの静かな響きを、両方の耳と肌で感じながら、私の心にはさざ波がたち続けている。
大事なビジネスのパートナーを、それもとびきり優秀な航宙士を亡くしたのだから、私の商売には翳りが差していた。いい機会だと思って仕事を整理し、彼の故郷を訪ねて、墓参しようとここまで来てみたところ、彼が死した日から数月を経ていたにも関わらず、彼の最後の表情と言葉が私の脳裏に、どうしてもこびりついて離れないでいることに気づいた。
最初は、わずらわしく得る物の少ない煩雑な書類仕事を放棄する口実が欲しかった。
しかし、それにも増して私は答えを探していたのだ。
生きるかたち、という言葉の意味を。
濃密に、限りなく原色に近い黄の色が空に波及していく様をひとしきり見つめたあと、私は彼の墓石の前から立ち上がった。ここに来れば何かがわかるかもしれない。そう思ったのは幻想に過ぎなかった。墓石に彼の魂が宿っているなどということはけしてないわけで、私はただ静かに思考が出来る場所を探していただけなのかもしれず、結論からいえばそれすらも、ままならないのだった。
墓地には他にもいくつか人影があった。
枯れすすきが風に鳴る中に、黒髪の女性が立ちすくみ、私を見ていた。私は彼女に見覚えがあり、おそらく彼女もそうで、髪をかき上げて私に会釈する。
友人の妹だった。
彼は異腹の妹がいると言って写真を見せてくれたが、なるほど、無骨だった彼とは男と女という性別を抜きにして纏う空気が違った。友人が梅の木のような節くれだった雰囲気だとすれば、妹はまるで木蓮のつぼみのようにうぶ毛に包まれた優しさを持っていた。
彼女とは、彼の葬儀の時に一度顔を合わせた。
「兄の」
私が会釈を返すと、彼女は私の顔を確かめるように一歩足を出した。ストッキングをはいた白い脚を、黒いパンプスがいろどる。カーディガンは濃紺で黒に近いとなれば、いままさに葬儀を抜け出てきたようで、私は胸が苦しくなった。
「わざわざありがとうございます」
いえ、と私は短く言葉をかけ、近づいてくる彼女を見つめた。

　すすきがざわりと呻いた。風がのそりと起きあがったようだった。心情と景観が不思議と一致する瞬間を実感して、私の表層にさっと冷たい何かが走った。
「はやいものね。もう半年経ちました」
「そんなになりましたか」
　夜の訪れを。
　私は感じ始めていた。
　あかね色がさり行く。
　彼女が手向けた白い花の一輪が、風に遊ばれて墓石から転げ落ちた。彼女はその様を見つめて、あら、という表情をこぼし、しかし微笑みながら、雑草のクッションのうえでさわさわと揺れる花を、助け起こそうとは思わなかったようだった。
　私は几帳面な性格であるので、仲間に追い出されたような白い花が気にかかり、彼女にひろわないのですか、と尋ねた。
「いいんです。ひとところに固まる生き方が必ずしもよいとはいえないと、教えてくれているのかもしれません」
　私が思っているほど、彼女は心を痛めているわけではないのかもしれない。彼女の振る舞いはそう感じさせる。
「ひとところ、ですか」
「ええ。あなたもそういう方だと伺いました」
「お兄さんに？」
　ことり、と彼女は頷いた。
「私はどちらかというと仲間はずれを嫌う方です」
　彼女はきょとんと瞳を澄ませて、何も答えなかった。何も答えられないのかもしれなかった。我ながらまずいことをいったものだと思う。初対面の人間に吐く言葉ではなかったか。彼女は何もなかったように言葉を続けた。
「兄から何か聞いていませんか」
「どういう理由で、その、船を飛び出したか、ということであるなら、お答えできることはありません。ただ、手紙をいただきました」
　友人から数日前に小包が届いた。白い便箋にびっしりときめ細かく端正な字体で、友人の言葉が書き連ねてあった。なぜ今になって届いたのかわからないが、彼は自分の死を計画的に進めていたと考えるのが自然だろう。
　内包物はもう一つあって、便箋と同じ白色の磁気式記憶装置だった。便箋にはそのことも書かれていて、彼の故郷にある端末にそのストレージを接続することで、内容を把握出来るようだった。私は、どこかに彼がとった行動の理由が書かれてあるのではと、便箋を何度も読み返してみたが、私の想念にかかるような文章はどこにもなく、ストレージにこそなんらかの手がかりがあると信じることにした。
　手紙には、実家にはくだんの妹がいる、妹は必ず毎日のように墓参するだろうから、機会があれば話でもしてみてもらえないか、とも綴られていて、私は君と私の妹が出会うことで、この世

界がどのように変容するか、みてみたいものだと締められてあった。
　大それたことを惜しげもなく吐く男だ、それに、みてみたいというのならばどうして死を選択したのか、などと私は半ば呆れながら手紙を読み返した日のことを思い出して、彼女にはにかんだ顔を向けた。
　太陽の残り香が、凪をわって吹いてきた風にさらわれたようだった。
　にわかに周囲がくらくなって、辺りはしんと静まりかえり、気づけば私達以外に誰もいなかった。
「あなたに会えと」
　私はようやく苦笑を抑えることができた。虫たちの声が聞こえ始めていた。そういえば今年は酷暑が続き、ようやく落ち着ける気候になってきた。私はふと、秋風に誘われて自分はここにいるのかもしれない、と思った。
「そうですか」
　微笑みの絶えない表情がなんとも愛らしい。
「この」と、いって私は懐を探る。白いストレージは淡い燐光をともして、宵闇に浮かび上がった。
「ストレージを預かりました。何か答えを探るなら、まずここからのような気がします」
　彼女は頷いたようだった。
　不思議に思う。
　私と彼女は先程から、本当に近くで会話をしているはずなのに、どこか遠く離れているようにも感じる。ほとんど初対面という現実から生じる緊張や、仕事柄相手を探ろうとする慎重な私の性格が災いしたとするのが都合が良いように考えるのだが、それ以外に私と彼女を遮る何かがあるように思われて仕方がない。ストレージ表面のホタルのような光がよりいっそう、その思いに拍車をかけた。光に照らされて、宵やみの中で淡くぼんやりと浮かび上がった彼女の顔は、ことさらに白く見えたのだった。
　彼女は無言で手を伸ばす。私は驚いて無条件に手を引っ込めようとしたが、かえって手を突き出すかたちになり、彼女の右手とふれた。冷たく美しい手だった。
　彼女は特に謝罪をすることもなく、ストレージを手に取った。
「なつかしい」
「大事にお使いのようだ」
　私は触れた彼女の手の冷たさを、もう一方の手でさすることで記憶に刻みつけながら、つぶやいた。
　ずいぶんと年月の経った代物だとわかる。表面の塗装はもしかしたら最近行われたものかもしれないが、私は同型の機種が市販されているのを目撃したことがない。
「兄です」
「え」
「兄の物です」
　彼女が微笑む。

「ああ、やはりそうですか。そのメディアを再生する手段が、彼の、ご実家にあると伺ったのです」
「ええ。確かに。今夜はどこかにご宿泊の予定がありますか」
「いえ。あてどもなく、ここに来たという感じです」
「あら。ならどうぞ、ご遠慮なくうちにいらっしゃって下さい」
「そういってもらえると助かります」
　記憶媒体の中身を早く知りたいと思う以外に、私には、彼について聞きたいことがいくつかあった。何しろ私は友人のことをほとんど知らない。もっとも、友人だと認識していた自分も知らないのだが。
　友人の妹はいち早く歩きはじめていた。
　彼女は彼の墓に頭は下げなかった。いつもここに来ているのならば、案外死者に対して身近なものを感じているのかもしれない。生きているか死んでいるかだけの違いで、彼女にとってみれば、ここにいる、という感情さえ抱くことができればよいのかもしれない。
　彼女は両腕で大事そうにストレージを抱えていた。そのストレージさえあれば、まるで何もいらないとでもいうようだった。私は暮れなずむ景色の中に、分け入って消え入りそうな彼女の背を慌てて追ったが、彼女はついに自宅に帰り着くまで一言もしゃべらず、後ろを振り返りすらしなかった。

## 2

　案内されたのは古い家だった。
　もう家の大半は、緑の蔓性植物に覆い被されそうで、野趣といえば聞こえはよいが、とにかく、古いというしかない。いつの時代に建てられたのか見当もつかない石と木の複合建築だった。私は、今すぐにでも倒壊するのではないかと不安になり、それでも知的好奇心を満足させないわけにはいかず、おろおろとしながら彼女にいぶかしげな視線を送り、入り口に立ちすくんだ。
　彼女が玄関に近づくと、淡い黄色の灯りが点いた。彼女はようやく振り返って、
「どうぞ」
　と、いった。私の足枷をほどくような、甘い声だった。
　虫声は屋敷の中でもよく聞こえた。廊下には年代物の絵画がいくつか連ねてあり、私は美術には疎いので、誰が書いたものか、どこの国の匂いがするかなど、一切わからなかったが、全て婦人がテラスでくつろいでいる構図だった。テラスといえば、彼女の家にも露台があり、露台のある中庭からは星も見えた。私は、循環式のポンプで作られた人工の池を中心に据えたテラスを左側にみて廊下を進み、エントランスからは最も遠い部屋に通された。
　友人の部屋だった。引き戸を開けると、ふっと風が這い出てきた。友人が昔よくつけていたコロンの匂いだった。
「お茶を持ってきますわ」
「おかまいなく」
　出てゆく妹に声をかけて、ぐるりと室内を見渡す。一面に敷かれた赤い絨毯の上に散乱した小さな荷物があり、洋の東西を問わず花瓶や器が収納棚のあちこちに置いてあった。
　よくみると機械部品も多かった。部品の一つを手に取ってみようと思いしゃがみ込む。体を支えるために伸ばした左手の中に、円筒形の感触が浮かんできた。
「口紅か」
　メカニカルな部屋にはあまりに不釣り合いな拾得物に私は、何かの弾みに落とした妹のものに違いないと即断した。
　友人はここで何をしていたのだろう。リップスティックをもって部屋を見渡す。
　部品を集めればちょっとした機械が作れるようで、同じような種類の部品が整理されてプラスチックのボックスに納められていた。スペアかもしれない。すると、何かをすでに組み上げた後なのか。
「汚いところでしょう」
　振り向くと彼女が立っていた。透き通るような左手に、紅茶をのせた盆がのっている。　。
「ずいぶんとまあ、何かに打ち込んでいる姿が残っていますね」
　私は少し驚いて、口紅を思わずポケットにしまいこんだ。しまった、と思ったが、彼女は私に不信感は抱かなかったようで、話を続けた。
「兄は手先が器用でしたから」
「昔から」

「ええ。自走する人形もいくつか作ってもらったことがあります」
　紅茶がことりと音をたててテーブルに置かれる。彼女は一度腰を下ろしてから、思いついたように立ち上がり、部屋の小窓を開けた。外からはじい、という虫の声がする。湿度はなく、空に雲はないが月は新月で夜に明るさはないようだった。
　私はじりじりと時が焼き付いていくような気持ちの昂ぶりを感じた。友人の過去という謎めいた問題が彼女の内側から解けていくはずで、私は昔から難問と呼ばれるものが好きだったから、とにかく、心が騒いだ。
　彼女はそんな私をよそに、星空を眺めている。
　まるで私などいないかのように。
　先ほど墓地から戻るときもそうだったが、彼女の対人意識は、私のよく知る身近な人物とは明らかに違うようだった。
　何かを尋ねたい。しかし、きっかけがわからず、
「よろしければ、その人形を見せてくださいますか」
　と彼女の背中に言葉を投げかける。
　彼女は振り向くと、ええ、と顔をほころばせて私を立たせた。あやうく飲みかけた紅茶をこぼしそうになったが、腕を引く彼女の力強さに半ば呆れ、軽く引きずられるように部屋を移動した。
「すみません、もっとゆっくり」
　という私の声にも彼女は答えない。私は心の奥に軽い憤りをはじめて芽吹かせた。
　案内された部屋はもっと乱雑だった。間口いっぱいに引き戸を滑らせると、忍び込んできた夜光が、床に散らばる工具や部品に濡れたような色彩を与えた。
　部屋の中央に黒い人形があった。顔には一切の装飾はなく、磨き上げられた鏡のような表層部がわずかな光を受けて、白色だけを反射させていた。
　光度を適度に抑えた、柔らかい橙色の光源に灯が入った。
　不気味な黒い人形。等身大の胴体から伸びる手足の関節はおかしな方向に曲がり、尻餅をついたような姿勢で壁に寄りかかっている。なんともいえず奇妙なのは、衣服にくるまれていることだろう。表情のない頭部にカジュアルな装束、いかに人間のかたちをしていようとも、私はその限りない違和感におぞましい恐怖を感じた。私にも妹がいるが、たとえ自走する人形を妹に送ろうと決意しても、およそ考えもしないデザインである。
　彼女は膝をつけてかがみ、その顔を優しくなでた。その仕草の艶やかさは例えようもないほどで、私はただ呆然とたちすくむ。このまましばらく、官能的ですらある彼女の仕草に見とれていたかったが、私は内側から肉欲として沸いてくる本能よりも確かに、異形とすらいえる人形の由来に心を揺さぶられた。
「お兄さんが作った人形」
「ええ」
　彼女は手を休めない。
　私には目前に広がるすべての現実が、ただ、遠景に見えた。

　この家だけは世界が違うのでは、そう心から思ったほどだった。
「自走するのですか」
「ええ。とてもなめらかに」
　不気味な予想が脳裏に過ぎる。
「みたい？」
　いや、とはいえなかった。彼女の三日月様の両眼からは妖しい光線が流れ出ていて、私には抗う術がなかった。
「起こしてください」
　私は促されるまま。
　黒い人形に近寄り、両脇に自分の腕を差し込む。
　友人の妹は腕を私の首に巻き付けた。
　妹に浮かんだ笑みと、肉薄した何もない黒い顔面様球体は、人形の腕にいきなり動力がみなぎり、私の首はあっけにとられたままくちゃくちゃにするのではないか、といういいしれぬ不安を立ち上がらせ、私を怯えさせるには十分な威力をもっていた。そもそも自走するからという話で見せてもらったのに、どうして自力で起きあがることさえできないのか、不安を消すために私の思考が別の回路を探しては、現実に屈し困惑している。
　腰をためて力を入れれば、人形は思ったよりも軽く、しなやかに後傾した。そのまま抱え起こす。人形はしっかり持ち上げると重心が安定する箇所が用意されていて、きれいに直立した。
　安心して腕を抜くと、人形の首ががくんと揺れ私の肩口になだれかかり、いよいよ混迷を極めた意思伝達経路が全身の毛穴をそばだてた。私は両手で人形の頭部を持ち上げて、首に座らせる。頭部は大理石のように冷たく、オイルが漏れているようでいくども滑った。
「お似合いですね」
　何がだろう。気づけば私はそんな率直な質問すら口にできなくなっていた。彼女の淡い笑みの理由もわからず、しかし逃げ出すわけにはいかない。
　正面からは見えなかったが、黒い卵形の頭部にはいくつも計装線が入っていて、線を追うとそのほとんどが黒いビニルひもでまとめられて、体の中心部に向かっていた。一部が外部へと伸びている。行き着く先には、旧規格のメディアリーダがあった。もしやと思い、私は、
「先程お渡ししたストレージですが」
　と彼女に訊く。
「あ、そうでしたね」
　間違いなかった。友人が送ってきたストレージの中身は、この黒い人形を媒体にして実世界にフィードバックできるようだった。
　彼女が部屋を出ていく。私は黒い人形と二人きりになった。
　落ちていたウェスで指についたオイルを落とす間、好奇心が恐怖を通り越して私の上層に上がってきたことに、はじめ私は気づかなかったが、体温が上昇し興奮を知覚できるようになると、自分の精神状態にようやく察しがついた。
　私はどうしようもない男なのだ。

友人の死すら、謎めいていなければただ過ぎ去っていくだけの現象として処理していたに違いなかった。生きるかたち、という不明瞭な言葉の響きだけが、私をここに赴かせたといってもいいかもしれない。
生と死はディジタルだ、私はそう思う。生と死の間には何もなく、不連続であって、関連もない。ただもう一人の私は、その繋がりを探している。
もともと敬虔なクリスチャンの両親に育てられた。科学を知る前は神も信じた。合理性と論理の中に長くいる内に神の存在は希薄になっていったが、私の内側にいる人格にはまだ神を信じる余白がある。死へと人がスイッチしていく過程の間に、簡単にはトレースできない謎があれば、あるいはもう一つの世界が連続性を伴って浮かび上がってくるのではないか。私はもしや、神を信じたいのかもしれない、そう思って自嘲気味に笑った。
白い発光を伴った記憶装置が彼女に抱かれて、部屋に入ってきた。彼女はいつの間にか着替えをすませており、白いサマーセータを着込んでいる。背景に白を抱え込んでなお、ストレージが発光していることがわかるのだが、これを制作した人間は何をおもって趣向を凝らしたのだろう。
私がストレージを受け取ろうとすると、彼女は軽く拒んで、人形の横にかがみ込んだ。
私は肩をすくめて彼女を見守るしかない。
ストレージが旧式であったので、私は特に動作時間は気にせず、じっくり構えて、己の内にある好奇心を楽しむことにした。
きっと恐ろしいほど長い時間、データの読み込みだけが行われるに違いない。磁気嵐が吹き荒れる宇宙空間で、ノイズキャンセラもブースタも無い状況で、地球から映像の伝達をされるようなものだろうと思っていた。
人形は私の思いとは裏腹になめらかに立ち上がった。
「あはああう」
意味を成す音の羅列には程遠い異音が、人形の、人でいえば耳の辺りから聞こえた。その音のあまりの異質さが私を現実に引き戻した。背を伝っていく冷たい信号が、脳で論理的な集合としてまとまり、私の表層に恐怖をまき散らす。随分と時間が長く感じられ、恐怖を体得するまでの時間の冗長さが、さらなる恐怖の引き金になった。
くるり、と首が私を向いた。
私は滑稽なくらい、ひっ、と口走って彼と対峙した。いまや私は、膝下に力を加えられずに彼を見上げているだけだった。
「そう驚くことはない」
友人の声だった。
動きのなめらかさと、人形の流暢な言語はいかにも異質だ。
「わたしだ、ハルト」
驚くべきことに、人形、いや、彼は私を認識していた。
「君なのか」
「ああ」

　私は自失したまま、人形を見つめた。やがてゆっくりと朝靄が剥がれるように、私の脳裏がクリアになり始めると、重ね重ね友人と名乗る黒いのっぺらぼうの人形を見つめずにはいられなかった。
　もう一度、問いたかった。
　あなたは、本当にあなたであるのかと。
　あるいはその問いは、本来私自身に問われるものであったかもしれない。
　人形が認識する私は、いまここにいる私のことであるとは思いがたかった。なぜなら、こうして対話するようにプログラムされた全ての動作は、あの古いメディアにおさめられていたものであり、人形は過去の私をトレースしている。人形は、過ぎ去った時間の中にいる私と会話しているのであって、私は純粋な意味での時間の差をもとに、現実を再構成しなければ、彼との関係は成立しないのではないかとさえ思った。
　ふとストレージに目をやると、もう光を放っていなかった。私は不思議と、魂が人形に吸い込まれていったのだと、苦もなく夢想したのだった。
「兄さん」
　彼女は、人形の腕にすがって甘い声を出した。
「元気にしていたか」
「ええ、とっても。兄さんは」
「見ての通りさ」
「見てもわからない」
　私は急に、何もかもが茶番に思えてきて苦笑した。
　彼は、私に何をいっているのだろうという表情を向けた。実際には表情など無いが、ノイズのような空気の乱れが、私にそのような現実を見せたに違いない。
　私は、口にしたかった彼への疑問を、できるだけ陰湿なものにならないよう、言葉を選び、会話を始めた。
「よく見てくれ。君の体は君のものではない」
「ハルトにはそう見えるだけだろう」
「人の認識力を馬鹿にしちゃいけない。私にとって、君は私の記憶の中の存在なんだ、重ねあわせることの出来ないパーソナリティなど、私は認めない」
「ハルト、君のあやふやな認識など私はあてにしない。私は私だ」
「自分の存在のあやふやさには気づいていないのか」
「存在には違いない」
「在ればいい、などと都合よく君が考えるのであれば、私は君を有能だと確かに感じていた時代の自分に告げ口をしたくなる。お前は馬鹿だ、と」
「兄さんは兄さんよ」
「そうだ」
「意識だけの存在が？」
「体はデバイスに過ぎない。我々の交流は常に官能的なものであって、すでに人はフィジカルな

世界からは脱却したがっているんだ」
「お前は何者だ。宇宙からの侵略者か」
「兄さんは兄さんよ」
「うるさい黙れ」
「妹を悪く言うのはやめてくれ。おかしいな、きっとうまくいくはずで、君は何も考えず私を受け入れてくれると信じていたのだが」
「その自信も数式の狭間から生まれたのか」
「君の言動も、似たようなものじゃないか」
「人の体は、その事を限りなく曖昧にできるのさ。ところが君には体がない。生身の身体がない」
「わたしに何かを聞きにきたのだろう」
「はぐらかすのか」
「原点に立ち返っただけじゃないのか」
「そんなもの、もともとなかった」
「残念だよ」
　彼はそれからけして私を見なかった。妹との他愛のない話に興じ、たとえば妹のセータをつまんで昔を懐かしんだりする光景を眺めているうちに、私は胸が悪くなって彼の家を後にした。
　外に出ると夜風がさやかだった。虫の音は聞こえなかった。
　道々、私はなぜあんなにも唐突に気分を悪くしたのか、考えた。
　つまり、人形は人形なのだ。間違いない。私の彼に対する嫌悪感は、根本的な人とはこういうものである、という特に根拠のない感情に端を発するものだった。
　友人が求めた生きるかたちは、結局、うかがい知ることができなかったのだが、鏡面のように磨き上げられた黒い人形の中に、確かに存在し得た人格を私は目撃した。あれはもはや、かたち、などという生ぬるい言葉の規格にあてはめて考えるにはあまりに突飛な代物だった。
　見事なまでに筐体を作り上げたものだ。
　表情がないことなど何の足枷にもならないほど、ストレージを繋いだ後の人形の動きは本当に精巧だった。
　だが、私のこころのどこかに、記録された記憶など意味がないというひっかかりがある。
　ただ、グロテスクであっても確かに人間そのものだと感じた人形の背後に、友人の求めていた答えの断片があるようにも思われるのだった。
　ポケットに手を入れると、指の先に何かがあたった。
　取りだして街灯にすかすと、さほど考えずに懐に入れた女物のリップスティックだった。
　いまさら、あの家に戻って友人の妹に、まさか返しに行こうとは思わない。
　私は立ち止まってキャップを開き、口紅の赤い稜線を眺めた。銀白色の光源を取り込んだグロスは、輝きの中に橙色を携えて、わずかに工業用オイルの匂いがした。
　そういえば、首回りに触れたとき、漏れたオイルで手のひらがいくども滑った。友人はあの人形にこのグロスを塗っていたのだろうか。あるいは兄が去った後、妹が塗っていたのだろうか。

妹のものだと思っていたが考えを改めるほかないか、と私は苦笑した。
　彼女の右手に触れた手の一部が、彼女がもっていた冷たい熱量を思い出している。
　私は立ち止まった。
　考えたくもない想像が一瞬脳裏をかすめた。すると瞬く間に、かつてない鈍い衝撃がこころを揺さぶった。
　私は友人の手紙に記された一文を思いだしていた。

　私は君と私の妹が出会うことで、この世界がどのように変容するか、見てみたいものだ。

　いまここで。
　私が立ち止まって口紅を眺めたのはなぜだろう。
　世界が、変容したのか。
「ばかばかしい」
　私は街灯の軸に口紅をぐちゃぐちゃに塗りつけた。
　どうだ、これが私の生きるかたちだ。
　世界が変わろうが、私は私だ。
　お前たちのような機械じゃない。
　動作を行うために必要なものを、自分の意志で壊すこともできない不自由さを、私は持っていないのだ。
　つぶれた赤い顔料が私の圧力にとうとう屈してうしなわれ、ケースが街灯にぶつかってかわいた金属音がすると、私は我に返って再び歩きはじめた。
　スティックは捨てた。
　友人をひとり、あらためて失った気がした。
　――いや。
　あぶれた粘性の高い付着物がてらてらと指に光るのを見て、私はひとりごちた。
　そもそも最初から、そんなものは、いなかったのだ。
　それに私は、段階もふまずいきなりファーストネームで話しかける奴は、嫌いだ。